FROM WARD

医科研附属病院検査部の活動について

検査部長　小柳津　直樹

最初に検査部活動の概略ついてまとめさせて頂きます。昭和58年施行との附則のついた病院内規によれば「臨床検査業務の円滑な運営をはかるため、生理、一般、血液、血清、生化学、細菌および病理の７検査室を置く」とされております。現況は生理室のみ1号館にありますが、他は診療棟地下にあり一般、血液、血清、生化学室は通称「大部屋」として１室に統合され細菌、病理室と共にそれぞれの看板に示される内容の検査業務を担当しております。これに加え検査分野への分子生物学的手法導入の必要性から約十年前に検査部遺伝子解析室が立ち上げられ昨年よりその一部がゲノム診療部に発展した経緯もあります。

検査部業務のカバーする領域は画像診断を除くほぼすべての医療情報に関与すると思われます。前述した「室」の名称に示されるようその業務は解析手技、検体の種類によって大別され、臨床各科および病理、微生物といった臨床との接点を有する部門がそれぞれ分担していた臨床材料解析を一括し、病院の共通部門として機能させるべく成立してきました。「学」の上からはもともと病理学から派生したものであり臨床病理学・臨床検査学の呼称のもとに発展して来ました。今後とも検査部の方向性というものは臨床医学の発展と解析手技の進化の２点から規定されて行くと思われます。

さて医科研検査部の今後と言う点からは大変革期に突入するであろうと認識しております。その第一の理由は医科研附属病院が昨年より探索型臨床研究(端的に表現すればその有効性未確立の実験医療)の拠点として本格的に発進したからです。その前進のためには臨床検体から最高度に引き出した情報を土台にevidence-basedの検証作業が不可欠となるからです。従って医科研検査部は一般病院の一般検査部であってはならずその担当するすべての分野において探索医療対応型に進化・変身する必要があります。第二の理由は（より一般的に時代の趨勢として）核酸・タンパク解析の革新的発展に伴い疾病が分子の言葉で規定され疾病規定分子を標的とした治療法が導入される新時代に入ったからです。さらに骨髄移植をはじめとした移植医療の導入によりこれまで経験し得なかった感染性病原体 - 宿主相関、未解明の免疫異常病態が新たな課題として浮き彫りになってきました。これらの新たな課題に取り組み臨床に意味ある情報を迅速に発信することが今後の検査部に与えられたミッションであると考えております。これらの状況を考える時、前述した「室」の区分はもはや意味をなさず検査部を横断的に再編成しあらゆる検体を統合的に解析するハード・ソフトを確立する必要性を感じています。幸いなことに新病院建築に伴い検査部も現診療棟に「室」の物理的壁を取り除いた統合解析部門として機能するハードを準備出来るメドがほぼ固まって来ました。ソフト面においても、まずあらゆる感染症に対し網羅的、迅速に対応する態勢確立のため「感染症対応ユニット」として病理、細菌、血清、血液のメンバーから構成されるチームを編成しその準備作業を開始しております。引き続いて免疫異常病態に対応するため「免疫モニタリングユニット」の立ち上げを計画しています。またすでに稼動中の検査オーダリングシステムに病理、細菌を組み込み院内IT化と医療情報データーベースシステム確立に寄与することも現在進行形の大きな課題です。

以上、今回医科研NOWに執筆の機会を与えて頂いたのを期に検査部の近未来計画を中心に記させて頂きました。徹底的な現業・実学精神のもと新病院に貢献、機能する部門を目指しますので何卒皆様のご支援をお願い申し上げます。

― 読者からの声 ―

平成13年12月６日に医科研の資料館「近代医科学記念館」がめでたくオープンした。資料館・博物館見学大好き人間の私にとって、どんな展示物を見ることが出来るか考えただけでワクワクしてくる。近代医科学記念館がオープンの時を迎えるまで関係者方々の苦労はさぞかし大変だったことでしょう。私の耳には記念館関係者の一人である免疫の高木智助教授が、展示物の件で医科研の近くにある北研（北里研究所）の「北里柴三郎記念室」を訪問していることや記念館の名称に「伝染病」の名前は使用することが出来ないなどの情報が入ってきたからだ。

「近代医科学記念館」はガラスの建物とレンガ風の建物に別れている。ガラスの建物には医科研の研究部紹介パネルがあり、レンガ風の建物が資料展示室になっている。展示室の中には、我が研究所・伝染病研究所（伝研）時代から医科学研究所（医科研）時代までが歩んできた歴史を紹介したパネル板があったり、展示欄・展示ケースには仕事の様子を描いたジオラマ、滅菌用銅箱、顕微鏡、古医書、実験ノート、ヘビ毒血清ビンなどの展示物が入っていた。それに医学系の資料館としては珍しく昆虫標本もある。

展示物は伝研時代のモノが中心で昔の研究所の業績を知るうえで重要な資料ばかりなので、私は一点一点かなりの時間を掛けて見てまわった。展示物の方には満足したが、少しがっかりした部分もある。それは、大学の資料館という割には展示棚・展示ケースの数が少なすぎることだ。また展示に関しても疑問に思ったことがいくつかある。たとえば何点かの展示物にはどう言うわけか肝心要のプレートが付いてなかったり、プレートを読んでみると展示物の紹介記載が完全なモノと不完全なモノとにわけることが出来るなど、残念だがプレートの取り扱い方に問題があった。ほかに一部の展示物に使用している紙プレートは早急にやめて、プレートは全部プラスチック板の方に統一して欲しいと願っている。ここで生意気な事をいう様だが、展示物の参考資料となるプレートの重要性を記念館関係者はもっと真剣に考えて取り組んで欲しいと思う。それに私がはじめて眼にした携帯用顕微鏡など展示室には８点もの顕微鏡があるのに、展示してある場所がバラバラに散らばっている、顕微鏡など点数の多い展示物は、一か所にまとめて形の違いなどがはっきりわかる方法で見せる工夫が必要である。展示方法を変えるだけで、展示物に対する価値観が違ってくることをわかって下さい。まだスタートしたばかりの「近代医科学記念館」に中味の充実した資料館を望むことは無理な注文でしょうか。

記念館に関していろいろな情報を耳にしたなかで、パンフレットの発行は考えていないと動物園や博物館などが発行するパンフレット、チラシなどを集めている紙モノコレクターの私に取って一番ショックな情報を聞き、紙モノ収集は出来ないと半ばあきらめた。しかし、私がはじめて近代医科学記念館を見学に行った日、記念館受け付けでパンフレットをもらって驚きと嬉しさで頭の中がパニック状態になってしまった。勿論その時もらった「近代医科学記念館パンフレット」は、保存ファイルに入れて私のコレクション一点にプラスした。紙モノコレクターとして記念館関係者の先生方の努力に感謝したい気持ちでいっぱいです。